

## 小西一雄教授の略歴および業績

1948年 3月20日生

### 学 歴

- 1966年 3月 東京都立武蔵丘高等学校卒業
- 1966年 4月 上智大学法学部法律学科入学
- 1971年 3月 同 卒業
- 1976年 4月 立教大学大学院経済学研究科博士課程前期課程入学
- 1978年 3月 同 修了
- 1978年 4月 立教大学大学院経済学研究科博士課程後期課程入学
- 1982年 3月 同 単位取得退学

### 職 歴

- 1971年 4月 東京都入都・中野区選挙管理委員会勤務
- 1972年 5月 同 依願退職
- 1972年 6月 学習塾に講師として勤務 (1976年 3月まで)
- 1976年 4月 立教大学経済学部副手 (1978年 3月まで)
- 1981年 4月 立教大学経済学部助手 (1982年 3月まで)
- 1982年 4月 立教大学経済学部専任講師 (1984年 3月まで)
- 1984年 4月 立教大学経済学部助教授 (1993年 3月まで)
- 1993年 4月 立教大学経済学部教授 (2013年 3月まで)
- 1993年 4月 立教大学経済学部経済学科長・教務主任 (1995年 3月まで)
- 1998年 8月 立教大学総長補佐 (2000年 3月まで)
- 2000年 4月 立教大学総長室長 (2002年 5月まで)
- 2004年 4月 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻主任 (2005年 3月まで)
- 2005年 4月 立教大学経済学部長・経済学研究科委員長・立教学院評議員 (2007年 3月まで)
- 2007年 4月 立教大学総長補佐 (2010年 3月まで)
- 2007年 5月 立教学院理事 (2007年 6月まで)
- 2007年 6月 立教学院常務理事 (2010年 3月まで)
- 2013年 3月 立教大学定年退職

2013年4月 立教大学名誉教授

2013年4月 東京交通短期大学学長（現在に至る）

この間、城西大学、高知短期大学、法政大学、武蔵大学、山梨学院大学、津田塾大学、作新学院大学、日本大学、東京農業大学の非常勤講師（兼任講師）を歴任。

### 学会ならびに社会における活動

1980年5月 信用理論研究会（現、信用理論研究学会）入会（現在にいたる）

1981年9月 経済理論学会入会（現在にいたる）

1986年5月 信用理論研究学会会計幹事（1997年4月まで）

1986年5月 東京都円高対策協議会（双眼鏡業界）に学識経験者として参加

1986年7月 （財）国民経済研究協会の委嘱を受けて東京都地場産業調査（工業用ゴム業界）に従事（1987年3月まで）

1998年4月 経済理論学会幹事（2007年9月まで）

1998年5月 信用理論研究学会理事（2011年5月まで）

2003年10月 日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員（2005年10月まで）

2008年4月 日本私立大学連盟人文・社会科学分野教育研究推進会議幹事会委員（2009年3月まで）

### 業績一覧

#### 著書

- ・『現代経済と金融の空洞化』【共編著】（有斐閣，1987年6月）
  - ・『経済学のオプティクス』【共編著】（ミネルヴァ書房，1994年3月）
  - ・『ポスト不況の日本経済』【共著】（講談社，1994年7月）
  - ・『金融論』【共著】（青木書店，2000年7月）
  - ・『日本のビッグ・インダストリー 金融』【共著】（大月書店，2001年1月）
  - ・『資本主義の成熟と転換 現代の信用と恐慌』【単著】（桜井書店，2014年4月刊行予定）
- パート論文掲載書を除く。

#### 論文

- ・「旧IMFの国際通貨制度の構造と金・ドル交換の意義（上）（下）」『立教経済学研究』第33巻第3号・第4号，1979年12月・1980年3月
- ・「過剰ドルと今日のドル体制（上）（下）」『金融経済』第191号・192号，1981年12月・1982年

2月

- ・「過剰ドル論の展開のために」『思想』第602号, 1982年2月
- ・「『信用創造論』と『再生産論』」『立教経済学研究』第36巻第4号, 1983年3月
- ・「ユーロダラーとアメリカ所在銀行」『立教経済学研究』第37巻第3号, 1984年1月
- ・「ユーロ市場 その発展と矛盾」『経済』第251号, 1985年3月
- ・「国際的な金融『革新』の波 その構造と意味」『経済科学通信』(基礎経済科学研究所)第49号, 1986年3月
- ・「アメリカの経済政策の矛盾と円高の現局面に関する一試論」『経済』第267号, 1986年7月
- ・「国際通貨『協力』の限界とドル不安の構造」『経済』第280号, 1987年8月
- ・「債権大国日本と金融収益依存経済の行方」『賃金と社会保障』第975号, 1987年12月
- ・「経済投機化と現在の金融不安」『経済科学通信』第57号, 1988年5月
- ・「醸成される新たな金融不安 『経済活況』の行方」(共著)『経済』第293号, 1988年9月
- ・「アメリカの金融自由化と日本」『行財政研究』(行財政総合研究所)第8号, 1991年3月
- ・「『バブル経済』の崩壊とドル 円ドル関係の現段階」『経済』第330号, 1991年10月
- ・「銀行の機能と役割」谷田庄三・野田正穂・久留間健編『現代金融の制度と理論』, 大月書店, 1992年5月, 所収
- ・「日本の金融大国化とドル体制」奥田宏司編『ドル体制の危機とジャパンマネー』青木書店, 1992年10月, 所収
- ・「国際通貨ドルについての覚書 準備・介入通貨論と為替媒介通貨論」『アメリカ研究シリーズ』(立教大学アメリカ経済研究所)第18号, 1996年3月
- ・「住専問題からみた不良債権と金融再編」『情況』1996年6月
- ・「金融の『規制緩和』の本質」山田弘史・野田正穂編『現代日本の金融』新日本出版社, 1997年3月, 所収
- ・「『金融バブル』の形成と崩壊 現代の国際通貨関係と産業循環」富塚良三・吉原泰助編『資本論体系9 1』有斐閣, 1997年12月, 所収
- ・「一般的利潤率の傾向的低下の法則と『置塩の定理』」『立教経済学研究』第51巻第4号, 1998年3月
- ・「金融ビッグバンと現代の金融危機」『経済理論学会年報 第35号』, 1998年10月
- ・「現代における通貨と信用の諸問題」北原勇・鶴田満彦・本間要一郎編『資本論体系10』有斐閣, 2001年4月, 所収
- ・「信用創造論の再検討」『立教経済学研究』第56巻第1号, 2002年6月
- ・「小泉・竹中改革と日本の経済・金融」『経済』第91号, 2003年4月
- ・「マルクス信用論のひとつの読み方」『経済』第100号, 2004年1月
- ・「戦後60年, 日本資本主義の現段階の特徴」『経済』第115号, 2005年4月

- ・「現代の信用制度と金」信用理論研究会編『現代金融と信用理論』大月書店、2006年1月、所収
- ・「アメリカの対外債務累積と『カジノ資本主義』の新段階」『季刊 経済理論』第43巻第2号、桜井書店、2006年7月
- ・「現代の産業循環・恐慌と信用 ドル体制下の世界」大谷禎之介編『21世紀とマルクス』桜井書店、2007年3月、所収
- ・「利潤率の傾向的低下と日本経済」『立教経済学研究』第66巻第4号、2013年3月
- ・「リフレ論の骨格と帰結 リスクに満ちた実験」『東京交通短期大学紀要』第19号、2014年3月（予定）
- ・「『マルクス信用論』における MEGA 研究の意義」『季刊 経済理論』第51巻第2号、桜井書店、2014年7月（予定）

#### 学会報告

- ・「共通論題『現代資本主義と国際通貨』コメント」『経済理論学会年報 第19集』、1982年9月
- ・「累積債務問題と今日のドル体制」『信用理論研究』（信用理論研究会）第1号、1984年7月
- ・「経済投機化と現在の金融不安」『経済理論学会年報 第26集』1989年7月
- ・「(共通論題報告) 90年代不況の原因と構造 日本経済を中心に」『経済理論学会年報 第32集』1995年10月

#### 時論・解説

- ・「円高・国際通貨の理解のために」（国際金融研究会・共著）『経済』1978年1月
- ・「七%成長と国民生活」『賃金と社会保障』第757号、1978年7月
- ・「円高の意味するもの アメリカの純債務国への転落と日本経済」『経済』263号、1986年3月
- ・「『ネズミ講』的金融構造と国家債務の累積」『書齋の窓』（有斐閣）第368号、1987年10月
- ・「債権大国日本と金融収益依存経済の行方」『賃金と社会保障』No. 975、1987年12月上旬号
- ・「ドルが安定しないのはなぜか」『経済』第288号、1988年4月
- ・「アメリカ経済と日本」『立教』第127号、1988年11月
- ・「『経済活況』と現在の金融不安」『損保調査時報』（全日本損害保険労働組合）第204号、1988年12月
- ・「ジャパン・マネーの時代」「金融の自由化・国際化」「金融の空洞化」岸本重陳・小沢雅子編『いま日本経済が面白い』（有斐閣新書）1989年10月

- ・「ドルと円 『金融大国』日本の構造」『経済』第309号，1990年1月
- ・「金融大国日本 その対外的側面と実像」『立教』第132号，1990年2月
- ・「カジノ資本主義の行方 トリプル安をどうみるか」『赤旗』1990年5月11日
- ・「最近の金融情勢をどうみるか」『損保調査時報』第221号，1990年6月
- ・「日米構造協議をどうみるか」『損保調査時報』第224号，1990年9月
- ・「金融機関の公共性を問う」『損保調査時報』第232号，1991年3月
- ・「アメリカの金融自由化と日本」『行財政研究』8号，1991年3月
- ・「金融大国日本の条件とドル体制」『現代金融問題研究会報告書(中)』(財)政治経済研究所，1991年8月
- ・「投機資金の経済かく乱と確信なき為替政策 九十円台に突入した円高が問いかけるもの」『赤旗評論特集版』(1991年8月1日)
- ・「いま金融情勢をどうとらえるか」『損保調査時報』第238号，1991年9月
- ・「二つの問いを考える」『損保調査時報』第242号，1992年1月
- ・「社会的不祥事とその後の金融情勢」『損保調査時報』第245号，1992年5月
- ・「バブルはなぜはじけたか バブル経済にみる日本経済の特徴と金融・証券」『歴史地理教育』1992年9月
- ・「縮小するジャパンマネーと邦銀の国際的地位」『経済』第341号，1992年9月
- ・「現代社会を読むキーワード講座 円高」『民主青年新聞』1993年3月10日
- ・「異常円高の背景と『カラクリ』」『労働運動』第334号，1993年5月
- ・「円高の新局面」『季刊 中小企業問題』(東京中小企業問題研究所)第67号，1993年7月
- ・「いま経済と金融をどうみるか」『損保調査時報』第262号，1993年7月(『銀行労働調査時報』銀行労働研究会，1993年8月号再録)
- ・「不況克服 私の処方箋」『賃金と社会保障』1994年1月上旬号
- ・「円・ドル関係の現段階」『労働運動』第346号，1994年5月
- ・「規制緩和 その本質と役割」『銀行労働調査時報』(銀行労働研究会)第538号，1994年5月
- ・「どうなる95年日本経済のゆくえ」『季刊 中小企業問題』第73号，1995年1月
- ・「価格破壊が『破壊』するもの」『旬刊 経理情報』(中央経済社)第747号，1995年3月
- ・「円高をどうみるか」『中小企業家しんぶん』第607号，1995年5月5日
- ・「どうなる日米経済と金融」『銀行労働調査時報』第563号，1996年6月
- ・「いまなぜ不良債権と金融再編か」『企業会計』(中央経済社)第48巻第7号，1996年7月
- ・「住専問題は何を示したか バブル経済から住専処理法までの経緯を踏まえて」『協同組合経営 研究月報』(協同組合経営研究所)第518号，1996年11月
- ・「パネルディスカッション 国民・消費者のための損保産業を求めて」『損保調査時報』第305号，1997年3月

- ・「大銀行の生き残り戦略 市場争奪の規制緩和」『連合通信 (隔日版)』(連合通信社) 1997年 6月5日
- ・「シンポジウム日本資本主義と経済民主主義」『経済』第24号, 1997年9月
- ・「金融機関の破綻どうみるか (上) (下)」『赤旗』1997年12月12日, 12月13日
- ・「Q & A 「30兆円銀行支援策」 金融不安払拭に役立たず」『連合通信 (隔日版)』1998年 1月31日
- ・「山一証券と金融ビッグバン 金融ビッグバンのゆくえと中小企業」『同友 HYOGO』第51号, 1998年3月
- ・「山一証券は本当に「マーケットの力に負けた」のか」『損保調査時報』第317号, 1998年3月
- ・「銀行の不良債権 なぜ生まれたか 解決の道すじは」『学生新聞』1998年7月25日
- ・「カジノ化進む国際経済 ビッグバンの見直しも必要」『朝日新聞』1998年8月22日夕刊
- ・「「カジノ経済」は資本主義をどこに導くか」(砂原一雄)『前衛』第703号, 1998年9月
- ・「転換期の日本経済」『社会運動』(市民セクター政策機構) 223号, 1998年10月
- ・「銀行の本来の役割は」『しんぶん赤旗日曜版』1998年10月25日
- ・「銀行の不良債権と解決方向」『経済』第38号, 1998年11月
- ・「長期不況と金融破綻」『行財政研究』(行財政総合研究所) 第38号, 1988年11月
- ・「経済のカジノ化と市場万能論の黄昏」『Kyodo Weekly』(共同通信社) 1998年11月2日
- ・「破綻する「グローバリズム資本主義」」(砂原一雄)『前衛』第707号, 1998年12月
- ・「経済再生への対抗提案 政府・経済戦略会議路線では危機を脱せない」(共著)『世界』657号, 1999年1月
- ・「BIS 規制と銀行の健全性 根拠ない指標の見直し必要」『朝日新聞』1999年2月6日夕刊
- ・「BIS 規制が銀行をギャンブラーにした」『文藝春秋』1999年5月号
- ・「一勸、富士、興銀 銀行統合を考える」『学生新聞』1999年9月25日
- ・「金融と日本経済の現状と課題」『季刊 労働総研』(労働運動総合研究所) 第36号, 1999年 秋季号
- ・「長期不況の構造と脱出の道」『農業と農協』(農業・農協問題研究所) 第48号, 1999年10月
- ・「私が選んだ3つのキーワード」『赤旗』2000年1月4日
- ・「金融ビッグバンと労働運動」『損保調査時報』第340号, 2000年3月
- ・「私が選んだ「ここが見どころ」」『赤旗』2001年1月4日
- ・「いま日本の経済と金融をどうみるか」『経済』第79号, 2002年4月
- ・労働者教育協会編『経済学Q & A』(共著) (学習の友社) 2002年4月
- ・「米国のものまねでは」『しんぶん赤旗日曜版』2002年11月3日
- ・「金融審議会の「複線的金融システム」構想の背景と問題点」『金融労働調査時報』第632号,

2003年1月

- ・「『円安』から何を讀みとるか 規制緩和か規制強化か」『世界』769号, 2007年9月
- ・「現在の金融危機経済危機の歴史的位罫 アメリカ中心の経済成長モデルの破綻」『月刊 東京』(東京自治問題研究所) 298号, 2009年1月
- ・「円高介入 問われる経済成長のあり方」『経済』第182号, 2010年11月
- ・「いまなぜ円高か」『経済』第193号, 2011年10月
- ・「世界経済の激動と危機の連鎖」『経済』第196号, 2012年1月
- ・「金融緩和で日本経済の根本問題は解決しない」『POSSE』第19号 (2013年6月)

### 書評

- ・関下稔ほか著『多国籍企業 国際金融不安の主役』『日本の科学者』(日本科学者会議) 第19巻第9号, 1984年9月
- ・小林威雄著『金融の基礎論』『立教』第123号, 1987年秋季号
- ・宮崎義一著『複合不況』『赤旗』1992年8月10日
- ・高懸雄治著『ドル体制とNAFTA』『赤旗』1995年7月10日
- ・今宮謙二著『日本の金融破綻』『しんぶん赤旗』1998年6月22日
- ・高田太久吉著『金融グローバル化を讀み解く』『しんぶん赤旗』2000年11月6日
- ・工藤晃著『マルクスは信用問題について何を論じたか』『しんぶん赤旗』2002年4月8日
- ・山口義行著『誰のための金融再生か』『立教』第183号, 2002年冬季号
- ・笠原清志著『社会主義と個人 ユーゴとポーランドから』『21世紀社会デザイン研究』第8号, 2010年2月
- ・知見邦彦著『米国における保険の金融化』『経済』第205号, 2012年10月

### その他

- ・「レキシコンの受益者として」久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコンの栞 No. 15』(大月書店) 1985年9月, 所収
- ・「学びとの出会い」大学生生活研究会編『キャンパスライフ A to Z Part 出会いのネットワーク』(青木書店) 1987年3月, 所収
- ・「寄生性, 腐朽性への強い批判 S. ストレンジ著『カジノ資本主義』を讀む」『赤旗』1988年3月23日
- ・「二つの『聖戦』の虚構」(「『視点』担当編集委員」) 経済理論学会有志編『湾岸戦争を問う』(勁草出版サービスセンター) 1991年9月
- ・「故小林威雄先生の人と学問」『立教経済学研究』第47巻第4号, 1994年3月
- ・「『証言』を損保の原点回帰の力に」『損保・いまと明日 職場からの証言』全日本損害保険

労働組合, 1995年9月

- ・「ディスカッション：金融不安定性のゆくえ」『季刊 経済と社会』（時潮社）第8号，1997年冬季号
  - ・「インタビュー学問解剖 国際金融」『99大学・短大合格ガイド 学問は面白い』（読売新聞社）1998年8月
  - ・辞典項目「バブル経済」ほか『大月 金融辞典』（2002年4月）
  - ・「日本経済再生のために」『全国革新懇ニュース』245号，2002年12月・2003年1月合併号
  - ・「院生時代の三宅先生」『ゆっくり，きちんと 三宅義夫先生を偲ぶ』2003年6月
  - ・「組合委員長としての下田先生」『結び来たりし日々 故下田直春先生十年後の思い出の文集』（文集刊行委員会）2005年5月
  - ・「インタビュー 日銀福島支店長 鉢村健氏に聞く」『立教』193号，2005年夏号
  - ・「学部改編シリーズ第五回 経済学部 小西一雄経済学部長に聞く」『立教』195号，2005年冬号
  - ・「三宅義夫先生と信用論研究」『評論』（日本経済評論社）第154号，2006年4月
  - ・「『資本論』にチャレンジを」『経済』176号，2010年5月
  - ・「研究者を志したころ」『立教経済学論叢』第77号，2013年3月
  - ・「真剣に『無駄』をしよう 私の大学観」立教大学全学共通カリキュラム事務局編『大学教育研究フォーラム』18号，2013年春
- その他，若干のエッセイなど省略。